

# 東京バツハ合唱団 月報

[ 第 514 号 ] 2005 年 4 月号

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732  
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky3Web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.514

April 2005

5-17-21-101 Funabashi,  
Setagaya-ku, Tokyo

## 書評ならざる私見

笠原 芳光 ( 団友 )

森井眞氏から『ジャン・カルヴァン ある運命』を頂戴した。

85 歳になられたという氏が、かつてストラスブール大学留学以来、長年にわたってカルヴァンの遺した全集や全書簡を精読して、その人生と思想を探求された結晶が、この書である。

宗教改革という世界史上の重大事件の主演のひとりであったカルヴァンの激動の生涯を、あえて淡々と叙述された理由は、「ある運命」という副題をどうしても付したかったという「あとがき」の言葉から推測される。それはカルヴァンへの愛憎を超えたいという氏の思念の表現であろう。

およそカルヴァンへの評価と批判は、キリスト教、とくにプロテスタンティズムを正統と異端に二分する判断といってよい。カルヴァンについては、プロテスタント神学の創始者としての評価と、ミシェル・セルヴェの火刑に同意したという批判がある。それはマルティン・ルターに関して、免罪符に反抗し、全聖書のドイツ語訳を完成した功績への評価と、農民戦争に際し、農民を弾圧したことへの批判があるのと、まさに相並ぶ問題である。

そのカルヴァンに対して性急に正邪の判断をすることをせず、それでもその背後に潜む著者のおもいを窺うことができるところが、まことに心憎い。

およそ筆者にとっての森井眞氏は、もう 40 数年前になるが、この本にもしばしば登場するマルティン・ブツァーのことを、はじめて教えていただいた人である。

敗戦直後、マルクス主義とキリスト教の相克に苦悩していた筆者は、赤岩栄が唱えた両立論、すなわちマルクス主義は社会変革の理論であり、世界観であるが、キリスト教は人間の主体や実存にかかわる宗教的な人生観であり、両者は次元を異にして、一個の人間において併立する、という考えに賛成し、以来この人に傾倒した。

その赤岩が指導していた日本基督教団上原教会の夏期集会で初めて森井氏に会い、またその教会が発行していた雑誌『指』で、氏の文章を読み、ブツァーという、カルヴァンが父とも慕った人物を知ったのである。そしてブツァーはカルヴァンと違って温容な、どちらかといえば異端に近い存在という印象を受けた。

さらに森井氏は、「日本のブツァー」ともいうべき人だとも思っていた。大村恵美子さんに会ったのも、その頃であり、今回この書評を依頼されたのも、そこに遡る由縁というべきだろう。

本書の「あとがき」でも、著者はストラスブール大学で、「ブツァーではとても無理なので、多少知識に蓄えのあ

るカルヴァンを選び、その聖霊論の発展を年代順に辿って論文を書くことにした。ただ、私には二兎を追うだけの力はなく、ここで、はるばる求めてきたブツァーをなかなかに諦めて、逃げ出そうとしていたカルヴァンに掴まってしまったのである」という。

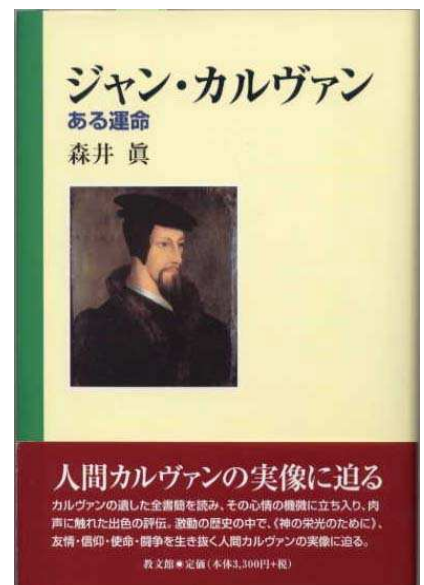
筆者にとってカルヴァンとは、かつて中山昌樹訳の『基督教綱要』を読んだだけという人物であった。今回、この本を読んでもカルヴァンに好意や関心を抱くには至らなかったが、ブツァーに言及している数箇所から、往時のカルヴァンの周辺にあった人間関係を察知することはできた。

さらにやや詳しく述べられているセルヴェについて、なぜこのような思想が非難され、このような人物が処刑されねばならなかったのか、キリスト教、わけてもその正統主義は今日のテロリズムにも匹敵するような狂気を潜在させているのではないか、と思わされた。

そして「自分と考えを異にする者を『殺してやりたい』とまで憎む宗教者、自分の属する教派教団の教勢の拡大と神の栄光とを混同して気付かない神学者（といわれる人）など、いまもけって稀ではない」という著者の言葉に共感を覚えた。

それにつけても森井氏は、この国においてブツァーに最も深い関心と知識を有している人だと思う。やむなくであったにしろカルヴァンについて、これだけ精密に描くことのできる力量を、まだほとんど知られていないといってもよいブツァーに注いでいただきたいものである。

このすぐれたカルヴァン伝も、森井氏の人生の、そして思念の半分でしかなかったといえ、非礼だろうか。そし



森井 眞著  
「ジャン・カルヴァン  
ある運命」  
教文館  
410 円・定価 3465 円

てブツァーは、さらにはセルヴェは、カルヴァンよりも重要な、興味深い人物であるという私見を述べざるを得ないのである。

最後に、いま一つ私見をつけ加えさせていただけるなら、およそ宗教改革とはなんであったのか、ルネサンスとともに近代を劃したといわれている宗教改革は、16世紀の出来事であって、もはや今日の問題ではないということである。

当時、教会の伝統を典拠とするカトリシズムに対して、プロテスタンティズムは聖書に帰れと主張した。だが今日、聖書の背後に隠されていたイエスという存在がかなり明らかになってきた。イエスは自らをキリストと称さなかったし、キリストと思わなかったであろうということは、もはや聖書学では定説となりつつある。それなら教会や聖書によって成立してきたキリスト教は今や根底から崩壊しつつあると言っても過言ではあるまい。

このイエスに関しては、カルヴァンもルターも、キリストとしてしか考えていなかった。もとよりイエスの真相はいまだに不明というほかはない。それゆえイエスを探求することが、これからの新しい<宗教>の課題である。

このことを「第二の宗教改革」ということもできるかも知れないが、そのようには言いたくない。およそ、革命や改革は永久革命、永続改革であるからである。

ともあれ、このような想いが、『ジャン・カルヴァン ある運命』を読んだために、いっそうリアルになってきた。そのことを述べて、この書評ならざる私見を終らせたい。

90歳を過ぎてても矍鑠(かくしゃく)としている人の多くなった昨今、森井眞氏、向後のご活躍を念ずるばかりである。

(筆者の笠原芳光氏は、宗教思想史専攻・京都精華大学名誉教授、神戸にお住まいです。)

森井 眞先生「ジャン・カルヴァン ある運命」  
出版記念祝会のお知らせ

東京バツ八合唱団の創立以来、今日に至るまで一貫して合唱団をお支えくださり、講演や月報への寄稿などで、ご指導を仰いでおります森井眞先生が、このたび御著書を出版なさいました。

1959年フランスご留学以来、ずっと研鑽を重ねてこられた貴重な成果で、私たち合唱団につらなる者にとっても、大きな喜びです。

合唱団では常々3月をお祝いの季節として夕食会を開いてきましたが、今年はその主要なお祝いを、森井先生のご本の出版記念会とさせていただきます、つぎのように会を催すことにします。どなたでもご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

#### 記

1. 日時：3月26日(土)18時(合唱団練習後)
2. 会場：「胡麻屋」世田谷区桜新町1-21-15(2階)  
TEL：03-5477-7887  
(田園都市線「桜新町」駅下車5分。会場地図の必要な方はお申し出下さい。FAXでお送りします。)
3. 会費：3,500円。
4. 申込み：3月24日までに合唱団事務局まで。  
TEL：03-3290-5731, FAX：03-3290-5732

(マタイ受難曲)における、群の役割 実践的演奏手引き (6)

## 福音書中の群衆合唱と3つの大合唱

大村 恵美子

### 福音書中の群衆合唱

合唱が受けもつのは、複数の群衆、祭司長ら、弟子ら、兵士ら、通行人らの登場人物の声である。合唱・がたがたに歌い交わすものが大部分で13曲、合唱だけが4曲、合唱だけが2曲、計19曲。

1) 群衆(全9曲、・ :6曲、 :1曲、 :2曲)

- Nr.36b そは死にあたれり
- Nr.36d あてよ、あててみよ、キリスト...
- Nr.45a (どちらを釈放するか?) パラバ!
- Nr.45b 十字架にかけよ
- Nr.50b 十字架にかけよ
- Nr.50d その血はわれらとわれらの子らに...

Nr.61b エリヤを呼べり

- Nr.38b げになれも仲間なり...
- Nr.61d 待て、エリヤ来たり救うか...

二重合唱で と がかけ合うのが大部分だが、Nr.38bは、ペテロにむかって、2人の女中が別々にNr.38aで2度、問いかけ、Nr.38bではペテロのまわりにいる複数の者が、3度めの疑問を発して、その結果ペテロの3度めの否認をひきおこすのである。

Nr.61bとNr.61dは、群衆の一部の者の、時間差をもった反応を、 と とに分けて歌わせる。

2) 祭司長ら(4曲とも・)

- Nr.4b されどそを祭りの間になさば...
  - Nr.41b われら知らず、なんじおのが責め受けよ
  - Nr.58d ひとを救いておのれ救えぬ者...
  - Nr.66b 主、いかなりや、かの偽り者...
- 4曲とも、威圧的に・でかけ合う二重合唱である。

3) 弟子ら(3曲とも)

- Nr.4d かく無駄なるわざ、何ゆえ?
- Nr.9b いずこに、主よ、われら過ぎ越しの...
- Nr.9e 主、そはわれなりや?

3曲とも、主イエスにむかい、また香油をそそぐ女にむかっただけの問いかけ。

4) 兵士ら(2曲とも・)

- Nr.53b やすかれ、ユダヤの君  
イエスにむかっただけの嘲りの二重合唱。
- Nr.63b げに こは神の子なりき  
・ がひと声、4声にまとまって告白する。

5) 通行人ら(・)

- Nr.58b 宮をこぼち、3日のうちに...
- つづく Nr.58dの祭司長らの合唱と類似した形で、無力のさまで十字架にかかるイエスを嘲って、 と とで囃したるよう歌う。

いずれも、生き生きと描写的な音楽だが、バツ八は、そ

の嘲り、憎悪の念から身をひいて、事件渦中の人物としてではなく、信仰を得た後世のキリスト者の立場から、イエスへのいたわり、また大それたことを仕出かしてしまった当事者たちへの痛恨、悲哀を込めている。それが、せりふのグロテスクさを、格調高い音楽として救い、聴く者を辟易させないのである。

### 独唱アリア+合唱の曲

「1.独唱アリアをめぐって」(月報500号、2004年2月)中の「アリアのなかの挿入合唱」の項で、すでに4曲について述べているので、ここではただ、思い出すだけにとどめよう。さらに、Nr.27bとNr.67を追加する。

- Nr.20 アリア 目覚めおらん (T)  
+合唱 われらが罪も眠り入らん (合唱)  
Nr.27a アリア わがイエスは捕らわる (二重唱S/A)  
+合唱 待て、主を放せ (合唱)  
Nr.27b 合唱 いかずち いなずまも (合唱・)

Nr.27aでは、だけで「待て、主を放せ」と3回短く叫んだ合唱が、曲の切れ目なしに27bに突入すると、大規模なヴィヴァーチェの二重合唱となって、雷の光と轟きとともに、切迫した苛立ちにかりたてながら、「裏切り殺せし者の血」を「くだけ、滅ぼせ、呑みこめ、散らせ」と怒りを極限までぶつける。ソプラノとアルトの放心したような、ゆっくりと静かな歌に始まっただけに、この結末のエネルギーは、不意に聴く者の度肝をぬくような凄さがある。

- Nr.30 アリア ああ、今やわがイエス去りぬ (A)  
+合唱 いずこになが友は (合唱)

第2部の冒頭におかれたこのアリアでは、アルトと2回交替しながら、合唱が「いずこになが友は、おお、汝いと麗しき者よ」「いずこになが友は去りゆきし」「われらもともに主を尋ね求めん」と、3回にわたって、かなり長いフレーズを歌う。花婿(イエス)花嫁(シオン)両者に対するやさしい思いにあふれている。

- Nr.60 アリア 見よ、イエスみ手を差しのべ... (A)  
+合唱 いずこ (合唱)

Nr.30と同じように、合唱を率いるアルトが、十字架にかかって死に、復活してふたたび親鳥が雛をその翼でおおうように慈しむイエスの愛を、すでに期待して歌い、合唱が、つき従う可憐な雛鳥のように、短い「いずこ？」を連発する。

Nr.67 レチタティーヴォ いま主は憩いぬ (四重唱S/A/T/B)+合唱 わがイエス さらば (合唱)  
バス、テノール、アルト、ソプラノの順に、ひとフレーズずつイエスに饒(はなむけ)の言葉をおくり、その合間に、合唱が「わがイエス、さらば」と名残りを惜しむ。これは、終曲の大合唱を前にして、オールスターキャストの大団円というステージを思わせるが、それにしても、オーケストラも・群の全員出勤なのに、合唱だけが指定されていない。美しいバックコーラスふうの音量を要求したのであるが、合唱も全員で、メッツァ・ヴォーチェの柔らかい声で参加させていただくことを、バツハに、例外としてお許しいただきたい。

### 3つの大合唱曲

- Nr.1 合唱 来たり 歎け 娘らよ (冒頭合唱)

- Nr.29 コラール 人よ なが罪に泣け (第1部終曲)  
Nr.68 合唱 歎きつつ み墓のもと (第2部終曲)  
3曲とも合唱・による。

いずれも歌い出しにカタルシスの涙を求める、堰を切るような勢いの音楽である。この3曲が、《マタイ受難曲》全体の大枠を大規模な合唱曲として構築している。

じつは、これらの内容については、あまりにも書きたいことが多く、またすでに世界中で出版されている研究書も膨大なものであろう。この私の「《マタイ受難曲》における、群の役割」と題する文章では、総出演のこれら3曲について、それ以上特記すべきこともないといっているのではないか。また機会があればあらためてペンをとることにして、今回はこれで、2007年の定期演奏会に臨む<実践の手引き>を終らせていただこう。<了>

### あとがき

一連のこの《マタイ受難曲》解説は、まず始めに、1982年、創立20周年記念の定期演奏会に大村指揮での《マタイ》を初演したあと、1995年8月に、銀座教会で講演したことがきっかけとなった。当然ながら、私にも、《マタイ》に関して、なかなか解けない疑問がたねにあった。

そのひとつが、独唱・合唱、オーケストラをふくめた・群の振り分けを、バツハはどんな意図で行なったのだろうか、ということだった。そこで、この問題を、この機会にある程度、追求してみたくなった。銀座教会で話したときには、全体的に組織立てて見わたすというよりも、聴く方の興味の喚起も大いに考慮しなければならないと思い、どちらかといえば、取りつきやすい5曲のアリアから話を進めることにした。

それがのちに合唱団月報にも載せ、序論ともいうべきものになった。その後、合唱団の長期的演奏計画が考えられてきて、2007年(創立45周年にあたる)春には、《マタイ》を再演する案が検討されはじめた。私は月報2004年2月号紙上で、《マタイ》全般に対する考察を再開することになった。こんな次第で、1冊の解説書を組み立てるつもりで書き始めたものではなく、1995年の講演を、アリアからアプローチしたいきさつもあって、2007年の再演までに、他の解説書とあまり同じようではない、私が演奏者にどうしても伝えて了解しておいてほしい内容に絞って、独唱から合唱へと、なるべく簡潔に書きついでゆこうとしたのである。

私の関心に左右されて、記述に濃淡ができてしまっているかもしれないが、それでもどこかに面白いと思って記憶にとどめていただけるようなところがあるならば、幸いである。いずれまとまった形で、読者のみなさまにお届けできたら、と期待しつつ、終ることにする。

### 日本語版《マタイ受難曲》上演に向け 入団のお誘い

東京バツハ合唱団では、2007年春の上演に向けて《マタイ》の譜読みを開始しました。

本格的な練習開始は、来年2006年5月の定演終了後ですが、カンタータの練習と並行して、少しずつ音取りをしています。この機会にぜひ、ご参加ください。

詳細は、事務局まで(連絡先:月報タイトル内参照)。



おたより

西村 清志 (元団員)

CD (「日本語演奏によるバッハ・カンタータ 50 曲選」) をお送りいただき、ありがとうございます。

さっそく拝聴しました。全くの私見ですが、近年のバッハの演奏は、驚くほど洗練されたものが、次から次へと登場して、極端に言えば、ビジネスの世界と同じようなすごい競争が繰り広げられていて、リスナーもいつの間にか「スーパー」なものでなくては満足しなくなっているような気がします。ぼくも結構そういう流れの影響をうけていると思います。

そんな中で、「日本語のバッハ」を聴いたとき、当初はさすがにとっつきづらかったのですが、徐々になじんでくると、演奏を聴くというよりは、教会の礼拝に参列しているという臨場感を覚え、それなりの緊張と充実とともに聴き終えることができました。やはり日本語がメッセージを明確に伝えてくれたためだと思います。

この演奏が一般的に、どう評価されているのかぼくには分かりませんが、キリスト教にまったく関心がないバッハファンにも、このメッセージ性を明確にした教会カンタータが、またひとつ違った魅力をもったバッハとして愛好されることを願っています。

演奏曲目解説 (第 97 回定演, 2005 年 5 月 15 日予定)

カンタータ第 137 番《ほめよ主を 強き栄えの君を》  
„Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren“ BWV137

解説: 大村恵美子

初演: 1725 年 8 月 19 日 (三位一体節後第 12 日曜日),  
ライプツィヒ。

バッハの全詩節コラール・カンタータの中でも、基本コラールを各曲で忠実に生かし、第 1 行「ほめよ 主を」をもって全曲を始めていること、自由詩によるレチタティーヴォを含まず、すべて 4 分の 3 拍子の近代的なコラールの旋律形を崩さずに用いている (ただし第 2 曲アルト・アリアは、4 分の 3 拍子のアルトと 8 分の 9 拍子の弦楽とを巧妙に結び合わせている)、など、はっきりしたコラール・カンタータの手法をとっている。

教会暦上のこの日に読まれる福音書は、マルコ 7: 31-37 で、イエスが聾啞者の耳を開き、口を開かせて癒した奇蹟の物語である。トランペット 3、ティンパニが象徴する < 力強い栄光の王者 > の実態は、武力による征服者ではなく、神の慈悲のあらわれとして、労苦を負ってあえぐ人間の心身をもいやす、能力あふれるイエスの像なのである。それが厳格なコラール・カンタータで追求された意図でもあろう。

1. 合唱 [コラール第 1 詩節]

J. Neander ほめよ主を 強き栄えの君を (Joachim Neander „Lobe den Herren, den mächtigen König der Ehren“ 1680,

『讚美歌 21』No.7 に収録) の第 1 節を、トランペット 3、ティンパニ、オーボエ 2 と弦合奏のリトルネロを前・間・後奏にはさみながら、力強く変奏する。

2. アリア [第 2 詩節] (アルト)

独奏ヴァイオリンのオブリガートをともなって、定旋律がアルトで修飾をほどこされながら歌われる。「驚のつばさに乗せて導き」の形容は、ヴァイオリンの、勇ましく羽ばたくパッセージでひろげられる。

3. 二重唱 [第 3 詩節] (ソプラノ/バス)

2 つの独唱アリア (2.アルト, 4.テノール) の中間、したがって全曲の中心に位置するこの二重唱は、2 本のオーボエがかけ合いながら奏する独自の動きのオブリガートに対抗して、コラール定旋律を並行短調 (ホ短調) にしながら、ソプラノとバスの 2 声部でカノン風に展開する。後半「恵みのつばさもて」からは、声も楽器も同様に、喜びのモチーフを連発して、神の恵みにいやされた者の喜びにわく。

4. アリア [第 4 詩節] (テノール)

トランペット (再演稿ではオーボエ) と指示された声部が、いまやコラール定旋律を八長調で吹き鳴らし、テノールがそのオブリガートとなってイ短調 (並行短調) で、感謝の歌をささげる。さらに通奏低音が、トランペット (オーボエ) ともテノールとも別な、独自の動機に貫かれて、幅ひろい動きで全体に雄弁ないぶきを与える。多層的に構築された力強い讚美。

5. コラール [第 5 詩節]

基本コラールの 4 声体による提示。トランペット 3、ティンパニが、栄えの王の荘厳さを加えるように、トランペットは高音域で、ティンパニは通奏低音よりも華々しい動きで、コラールをかざる。

神の威光を誇示するようなこのカンタータの外見は、当日の福音書章句 聾啞の二重苦を負った人を、イエスが一對一で、手をつけ口をつけて癒したという、その光景を思い浮かべたときに、神の真の力がどこに向かうか、ということを感じさせられ、いっそうこの音楽に親しみをおぼえさせられるのである。

晩年に再演されたとき (1746/47 年) に、第 4 曲テノール・アリアのオブリガートが、トランペットからオーボエに変えられたということだが、バッハの意図が、トランペットの威厳よりもオーボエの慈しみへと改められたのだとしたら、そのほうがより当を得たものになったとも考えられるだろうか (今回はオーボエで演奏)。

第 97 回定演の演奏曲目解説は、以下の月報各号に掲載されています。  
カンタータ第 147 番《心と日々のわざもて》...04 年 11 月号 (No.509)  
カンタータ第 116 番《平和の君 イエス》...04 年 12 月号 (No.510)  
カンタータ第 129 番《ほめ讃えよ 主を》...05 年 3 月号 (No.513)

第 97 回定期演奏会「珠玉のコラールカンタータ集」

日時: 2005 年 5 月 15 日 (日) 午後 4 時開演  
会場: 石橋メモリアルホール (東京・上野)  
入場料: 3000 円 (当日 3500 円)  
詳細はチラシをご参照ください。